

第18回デメンシアカンファレンス 報告要旨

『経過中に嫉妬妄想を呈し、長期の経過後に認知機能低下を来したパーキンソン病の症例』

発表者：池田篤平、坂井健二（金沢大学脳老化神経病態学(神経内科)）

司 会：池田芳久（同上）

【要 旨】

47歳時発症の男性症例で、手の震え、歩行障害に対して、パーキンソン病として近医で加療されていた。妄想(妻が浮気をしている)や、幻視(電球がくるくる回っている)を認めていたが、日常生活は送っていた。64歳時、嫉妬妄想(妻が男を連れ込んできた)から妻をバットで叩き同院精神科へ入院し、65歳時より当院精神科で加療を開始した。MRIや脳血流ECD検査では有意な萎縮や血流低下などは認めなかった。その後、当院や近医精神科などで入退院を繰り返した。幻視(人が見える)および嫉妬妄想(妻の不貞)をみとめた。69歳からはNHO医王病院通院となり、同院での入院を繰り返した。幻視を時に認め、妻への性的な脱抑制はみとめたが、暴力を振るうことはなかった。摂食、車椅子への移乗などは自立しており、近時記憶障害などは認めなかった。72歳時の肺炎後よりADL低下・ドーパミンアゴニストにより幻視・不穩のため、薬物調整困難となった。摂食障害あったが経管栄養を行わない方針となり、73歳時に死亡し病理解剖を行った。中枢神経病理では、肉眼的に軽度の前頭葉の萎縮に加え、黒質や青斑核の脱色が明らかであった。光顕所見では黒質や青斑核、迷走神経背側核の神経細胞脱落が明らかでリン酸化 α シヌクレイン陽性のLewy小体が観察された。大脳皮質や扁桃核や海馬傍回といった大脳辺縁系にも軽度のグリオーシスを伴う神経細胞脱落が認められ、皮質型のLewy小体が観察された。Lewy小体病理の広がりについて、McKeithらの2005年の報告におけるlimbic typeと判断した。その他に、亜急性期の脳梗塞所見が散見されたが、老人性変化は軽度であった。以上の所見よりlimbic typeのLewy小体病と病理診断した。

【質問・意見】

質問：幻視といった精神症状が認められたことについて、後頭葉の病理所見については？

回答：肉眼的、光顕的に後頭葉には有意な所見は認められず、Lewy小体も観察されなかった。

コメント：DLBにおける症状に相関するような病理学的所見について、現時点では不明な点が多い。おそらく知られていない何らかの変化が存在し、臨床症状と関連していると考えられる。

コメント：本例は認知機能障害の有無がはっきりはしていないが、精神症状が目立っていた。病理学的にはより広範囲にLewy小体病理の出現が予想されたが、大脳皮質への広がりには限定的であった。Lewy小体病における大脳皮質のLewy小体の頻度は非常に少ない。おそらく、Lewy小体や α シヌクレインの蓄積以外の要因が大脳の機能障害と関連しているのであろう。